ウィトゲンシュタインの『哲学的探究』を読む
——「論理学と哲学」に係わる部分——

黒崎　宏

以下は『哲学的探究』の中で，特に「論理学」と「哲学」に係わる部分を，独断と偏見であるかも知れないという事を恐れずに，読み且つ解説したものである。私としてはそれなりに，一点の疑惑も残さずに，読み解きたいのである。徹底的に解読したいのである。そのかわり，冗長であると思われる所や強引であると思われる所も，あるであろう。おおかたの御批判を乞いたい。

なお，〔　〕は私の挿入である。また，〔　〕をとばして読んでも，文章は通じるようになっている。原文のイタリックにはアンダーラインをつけてある。

89. これらの考察を通して我々は，「論理学は，如何なる意味で高尚な或るものであるのか？」という問題に，逢着するにたち至る。

何故なら論理学には，或る特殊な深さ——或る一般的な意味——が，当然の事として与えられている様に思われるから。論理学は，全ての学問の基礎に横たわっている様に，思われるのである。——何故なら，論理的考察は万物の本質を究明するのであるから。論理学は，物事をその基礎に於いて見ようとするのであり，個々の具体的な出来事が事実としてどうであるかに就いて，気にかけてはならないのである。——論理学は，自然現象に於ける諸事実に対する関心からも，それらの間の因果関係を把握する必要性からも，生まれるのではない。論理学は，経験され〔得〕る全ての事の基礎あるいは本質を理解せんとする努力から，生まれるのである。しかし我々は，経験され〔得〕る全ての事の基礎あるいは本質を理解せんとするために，新しい事実を捜し出さねばならないかの如くである，というわけではない：むしろ我々の探究にとって本質的なことは，我々は探究によって何か新しい事を学ぼうとすべきではない，

という事なのである。〔実は〕我々は，既に我々の眼前にむき出しに横たわっている或る事を，理解したいのである。何故なら，我々はそれを或る意味で，理解していないように思われるのであるから。

アウグスチヌスは（『告白』の第XI巻・第14章において）こう言っている：「それでは，時間とは何なのでしょうか？　誰も私に尋ねないならば，私は知っております。〔しかし〕そう尋ねる人に説明したいと思うと，私は知らないのです。」——人はこの様なことを，自然科学の問い（例えば，水素の比重についての問い）について言うことは，出来ないであろう。誰も私に尋ねないならば，知っているが，説明しなくてはならない段になると，もはや知らないというもの，それは，人が〔——捜し出さねばならないものではなく——〕思い出さねばならないものなのである。（そして明らかにそれは，何らかの理由から，思い出すことが困難なものなのである。）

90. 思い出すという事は，我々にとっては，現象の本質を見抜かねばならないかの如く，なのである：しかし我々の探究は，現象に向けられているのではなく，言うなれば，現象の「可能性」に向けられているのである。つまり我々は，現象に就いて行なわれた種々の言明を思い出すのである。〔言明は，第一次的には，現象の可能性を述べているのであるから，である。〕それゆえアウグスチヌスもまた，人が持続する出来事について，そして過去，現在，未来の出来事について，行なう様々な言明を，思い出すのである。（勿論その様な言明は，時間，過去，現在，未来についての，哲学的言明ではない。〔それは，普通の日常生活に於ける言明なのである。〕）

我々の考察は，それ故，文法的考察なのである。そしてこの考察は，誤解を取り除くことによって，我々の問題に光を投げかけるのである。語の使用に係わるこの誤解は，なかんずく，我々の言語の種々の領域に於ける表現形式の間の或る類似によって，引き起こされるのである。——〔さて〕かなりの誤解は，或る表現形式を或る他の表現形式によって置き換える事によって，取り除かれる。或る表現形式を或る他の表現形式によって置き換える，という手続きを，人は我々の表現形式の「分析」と呼ぶことが出来る。何故なら，この手続きは，時には，解体し分解する事と類似しているから。

91. さてしかし，或る表現形式を或る他の表現形式によって置き換えるという事は，我々の言語形式には最終的分析なるものが，それ故，表現の或る一つの完全に分解された形の様なものが，存在するかの如くに思わせるかもしれない。即ち，或る表現形式を或る他の表現形式によって置き換えるという事は，我々が通常用いている表現形式は本質的に未だ未分析なのであり，我々が通常用いている表現形式には，暴露されるべき或るものが隠されているかの如くに，思わせるかもしれないのである。もし，その或るものが暴露されるならば，それによって，我々が通常用いている表現形式が完全に明らかになり，我々の問題は解かれるであろう〔，というわけである〕。〔(しかし，その様に思うことは，誤りである。)〕

この「もし，その或るものが暴露されるならば，それによって，我々が通常用いている表現形式が完全に明らかになり，我々の問題は解かれるであろう」という事は，以下のようにも言われ得る：我々は，我々が通常用いている表現をより正確にすることによって，誤解を除去するのである。しかしそうすると，我々が通常用いている表現をより正確にするという事は，我々は或る一定の状態，完全な正確さ，を追い求めているかの如くに，思われるかもしれない；そして，我々が或る一定の状態，完全な正確さ，を追い求めるという事が，我々の探究の本来の目的であるかの如くに，思われるかもしれない。〔しかし，その様に思うことは，誤りである。〕

92. 前節で言われた事は，言語，命題，思考の本質についての〔よくある〕問いの中に，現われている。——何故なら，もし我々が〈我々の探究〉に於いても言語の本質——言語の機能，言語の構造——を理解しようとするならば，その言語の本質は，言語，命題，思考の本質についての〔よくある〕問いが念頭に置いているもの，ではないのであるから。何故なら，その様な問いは，本質の中に，既に明白であるもの，そして，整理する事によって一目瞭然になるもの，を見てはいないから。その様な問いは，本質の中に，表面の下に隠れているもの，内部にあるもの，我々が事の本質を見抜くときに見るもの，そして，分析が掘り起こすべきもの，を見ているのであるから。

「本質は我々から隠されている。」：これが，〔言語，命題，思考の本質

についての，よくある〕我々の問いが何と言っても想定している形式である。我々は問う：「言語とは何か？」「命題とは何か？」〔「思考とは何か？」〕そして，これらの〔本質を問う〕問いに対する答えは，〔――『論考』の6がそうである様に――〕これを最後としてきっぱりと与えられなくてはならない；そして，如何なる未来の経験とも独立に，なのである。〔勿論，この様に考えることは，誤りである。〕〔『論考』の6とは，以下のような命題である：真理関数の一般形式は［$\bar{p}$，$\bar{\xi}$，$N(\bar{\xi})$］である。これが，命題の一般形式である。〕

93. 或る人は「命題，それは，世界の中で最も日常的なものである。」と言うかも知れないが，他の人は「命題――それは非常に不思議なものである！」と言うかも知れない。――そしてこの後者の人は，命題は如何に機能するのかという事を，とにかく調べる事が出来ないのである。何故なら，命題と思考に関する我々の表現方法の形式が，彼を邪魔しているのであるから。

何故我々は，命題は不思議なものである，と言うのか？　それは，一面に於いては，命題が持っている巨大な意義のためである。(そして，これは正しい。)〔しかし，〕他面に於いては，その様な意義と言語の論理についての〔我々の〕誤解が我々を惑わし，我々に，命題は並外れた事，確かに比類の無い事，を行なうに違いない，と思わせるためである。――我々には，誤解を通じて，命題は不思議な事を行なっているかの如く思われるのである。

94.「命題，或る不思議なものよ！」：かく言うことの中に，既に，全表現の純化〔という誤った理念〕が存在する。〔ここには，〕命題記号と事実の間に純粋な中間物〔――『論考』では「思念」――〕を想定する傾向が存在し，或るいはまた，命題記号自体を浄化し純化しようとする傾向が存在するのである。――何故なら，我々が，〔表現という事には〕異常なことは含まれていない，という事を〔正しく〕見て取ることを，我々の表現形式が――我々を怪物キメラ達〔(例えば「思念」)〕を捕まえるべく駆り立てる事によって――多様な仕方で妨げているのであるから。

95.「思考は，或る比類無きものであるに違いない。」〔そうであろう

か？〕我々が，事態はコレコレである，と言い，そしてそう思うとき，我々は，我々が思っている〔当の〕事を持って，事実の手前の何処かで立ち止まったりはしない。〔したがって，中間物は必要ではない。〕我々は，〔事態は〕コレコレ――シカジカ――である，と〔，中間物なしに，直に，真として〕思うのである。〔(これが，正しい。)〕――しかし人はこのパラドックス（これは確かに，形の上からは自明である。）を，次のようにも表現することが出来る：人は，事実でない事を考えることが出来る。〔もし我々が，事態はコレコレである，と言い，そしてそう思うならば，我々は，事態はコレコレである，という事を，真として思うのである。しかし，これはパラドックスである。何故なら，事態はそうではないかもしれないから。〕

96. ここで意味されている特殊な錯覚には，様々な方面から，他の諸錯覚が接続して来る。思考と言語は，今や我々には，世界に対する比類の無い対応物である像として，現われて来る。〔そして〕命題，言語，思考，世界，といった概念は，列をなして順に並んでおり，それらは相互に同等なのである。〔(しかし，勿論，これらは何れも錯覚である。)〕（さてしかし，これらの語は何に用いられるべきなのか？　これらの語が用いられるべき言語ゲームは，〔実は〕ないのである。）

97. 思考は，光背で囲まれている。――思考の本質，即ち論理，は，秩序を，しかも，世界のア・プリオリな秩序を，表現している。それは，世界と思考に共有されていなくてはならない可能性の秩序なのである。しかしこの秩序は，最高に単純でなくてはならない様に思われる。それは，あらゆる経験に先立っており；全経験に行き亘らねばならず；それ自体には，如何なる経験にまつわる曇り或るいは不確かさも，付いていてはならないのである――それは，言うなれば，最も純粋な結晶でなくてはならないのである。しかしこの結晶は，抽象的なものとしては，現われない；それは，或る具体的なものとして，否それどころか，最も具体的なものとして，言わば，最も固いものとして，現われるのである。（〔この思想は〕『論考』5．5563〔において，述べられている。そこに於いてウィトゲンシュタインは，次のように言っているのである。「事実，我々の日常言語は全て，そのあるが儘に於いて，論理的に完全に秩序づけられている。――

我々がここで述べるべき，かの最も単純なるものは，真理の似姿ではなく，十全な真理そのものなのである。(我々の問題は，抽象的なものではなく，おそらくは，存在する最も具体的なるものなのである。)」〕)

我々は，或る錯覚に陥っているのである。それは，我々の探究が特別なものであり，深いものであり，我々にとって本質的なものであるという事は，我々の探究は言語の比類無き本質——命題，語，推論，真理，経験，等々，といった諸概念間に成り立つ秩序——を把握しようと努めている，という事の中にある，という錯覚である。〔この錯覚に於いては，〕その様な秩序は——言わば——超-概念間の超-秩序なのである。とは言えしかし〔本当は〕，「言語」「経験」「世界」といった語は，もしそれらが〔何らかの〕使用を有するとすれば，「机」「電灯」「ドア」といった語のような，卑俗な使用〔——言わば，「超-使用」ではなく，「形而下的使用」——〕を有さねばならないのである。

98. 一面に於いては，我々の言語の命題は全て「そのあるが儘に於いて，秩序づけられている」という事は，明らかである。即ち，あたかも，我々の日常の曖昧な命題は完全無欠な意味など有せず，完全な言語は我々によって初めて構成されるべきなのである，と言わんばかりに，我々は理想〔言語〕を追い求めている，というのではないのである。〔これは，本当である。〕——〔しかし〕他面に於いては，意味のあるところには，完全な秩序がなくてはならない，という事も明らかであると思われる。——それゆえ，最も曖昧な命題にも，完全な秩序が隠されているのでなくてはならない，というわけである。〔しかし，これは誤りである。〕

99. 人は言うかも知れない：命題の意味は，勿論，あれやこれやを未確定の儘にしておく事が出来る。しかし，それでも命題は，或る確定した意味を持っていなくてはならない。〔(この分かりにくい文章は，命題として「AまたはB」を考えればよいであろう。G. Hallett, *A Companion to Wittgenstein's "Philosophical Investigations"*, p. 183. を参照。)〕未確定の意味——本来それは全く意味ではないであろう。——これは丁度，未確定の境界——本来それは全く境界ではない，という事と似ている。ここで人は，例えばこう考える：もし私が「私はその人を部屋にしっかりと閉じ込め

た――ただドアが一つ開けたままになっている。」と言えば，――私は彼を全く閉じ込めたのではなかった。彼はただ，見かけ上，閉じ込められているだけなのである。ここで人は，次のように言う傾向があろう：「君はそれ故，それによって全く何もしたことにならない。」穴のある囲い込みは，全く囲い込みではないも同然なのである。――しかし，これは本当であろうか？〔本当ではないのである。〕

100.〔対話者は言う。或るものについて，〕「もしその規則の中に曖昧な部分があるとすれば，それはやはり〔言語〕ゲームではない。」――〔ウィトゲンシュタインは問う。〕しかしその場合でも，それは〔言語〕ゲームであるのではないのか？――〔対話者は答える。〕「ほう，恐らく君はそれを〔言語〕ゲームと呼ぶであろうが，しかしそれは，やはり，何れにせよ完全な〔言語〕ゲームではない。」即ち，その場合には，それは不純なのであり，そして，いま私に興味があるのは，ここで不純にさせられた当のもの〔――即ち，純粋なもの――〕，なのである。〔(アンスコムの英訳を参照。)〕――〔ウィトゲンシュタインは言う。〕しかし私は言いたい：我々は，我々の表現方法の中に在る理想〔(例えば，第101節で問題にされている「ねばならぬ」という表現方法の中に在る理想)〕が演じる役割を誤解しているのである。即ち，我々もまた，その規則の中に曖昧な部分があるものを〔言語〕ゲームと呼ぶであろうが，ただ我々は，我々の表現方法の中に在る理想に幻惑されて，「〔言語〕ゲーム」という語の現実に於ける使用を明瞭に見ることがないのである。

101.〔対話者は言う。〕我々は言いたい：論理の中には，如何なる曖昧も，存在し得ない。今や我々は，「ねばならぬ」という理想は現実の中に存在するのだ，という理念を持って生きているのである。人は未だ，「ねばならぬ」という理想が如何に現実の中に存在するのか，を見る事なく，そしてまた，人は未だ，この「ねばならぬ」の本質を，理解していないとはいえ，そうなのである。我々の信じるところでは：「ねばならぬ」は現実の中に潜んでいるに違いないのである；何故なら，我々はそれを既に現実の中に見ていると信じているのであるから。

102.〔対話者は言う。〕論理的な命題構成の厳格で明確な規則は，

我々には，背景にある何か或るものであると，思われる——〔即ち，記号を〕理解するときの媒介物〔(例えば，『論考』に於ける「思念」)〕に隠れている何か或るものであると，思われる。私はその様な規則を，既に今（たとえ，媒介物を通してであろうとも）見ているのである；何故なら，私は確かに記号を理解し，記号でもって何かを意味しているのであるから。

103.〔ウィトゲンシュタインは言う。〕この理想は，我々の思考の中に，確固として不動に居座っている。君は，それから離れる事が出来ない。君は，〔それから離れようとしても，〕常に連れ戻されるに違いない。それには，外側というものが存在しない；外側には，生きられる余地がないのである。——この様な理想は，〔一体〕何処から生じたのか？〔ともかく〕それは，言わば眼鏡のように，我々の鼻にのっており；そして我々は，〔哲学者として〕我々が注視するものを，それを通して見るのである。〔そして，〕それを取り去る事などは，全く考えつかないのである。

104. 人は事柄〔(命題)〕に，表現方法の中にあるもの〔(像)〕を，述語として付ける。〔(即ち，命題は像である，とするのである。)〕〔(そして，ここに於ける，命題と像を)〕比較する事の可能性——それは我々に感銘を与えるものであるが——を，我々は，最高に一般的な事態の知覚と考えるのである。〔勿論これは幻想である。〕〔(Baker & Hacker, Vol. 1, p. 510参照。)〕

105. もし我々が，〔第97—98節で問題にした，〕かの秩序——即ち理想——を，現実の言語の中に見出さねばならない，と信じるならば，人が日常の生活に於いて「命題」「語」「記号」などと名づけるものには，満足しないであろう。

論理学が取り扱う命題や語は，或る純粋なるものであり，ハッキリと境界が与えられているもの，でなくてはならない。そして〔，そう考えて〕今や我々は，本来の記号のこの本質について，頭を悩ましているのである。——この本質は，例えば，記号についての表象であろうか？或るいは，〔記号についての〕この瞬間に於けるイメージであろうか？

〔どちらでもない。〕

106. ここに於ける困難は，我々が——言わば勇気を持って——日常思考される物事に留まるべきである事を見，そして，我々の方策によっては全く記述し得ない究極の細部をも記述しなくてはならないかの如くに思わせる間違った道に，陥らない様にする事，なのである。この困難さは，我々にとっては，もつれた蜘蛛の巣を我々の指で修繕しなくてはならないかの如き困難さ，なのである。

107. 我々が日常言語を詳細に観察すればするほど，日常言語と我々の要求の間の抗争は，ますます強くなる。（論理の結晶の様な純粋さは，確かに〔探究の結果〕私に与えられたものではなく，或る要求なのである。）この抗争は耐え難くなり；いまやその要求は，〔理想化されて，〕空虚なものになってゆく様に思われる。——我々は，摩擦のないツルツルした氷の上におり，したがって条件は，或る意味では，理想的なのであるが，しかし我々は当にその事の故に，前に進むことも出来ないのである。〔しかし〕我々は前に進みたい；そしてその時は，我々には摩擦が必要なのである。〔かくして，私は言いたい：〕ザラザラした大地へ戻れ！

108. 我々が〔今〕認識しているところによれば，我々が「命題」とか「言語」とかと呼ぶものは，〔かつて〕私が〔『論考』で〕思い描いていた形式的な一単位ではなく，多かれ少なかれ相互に血縁関係がある〔諸〕構成物の家族なのである。——しかしそうであるとすると，〔『論考』では全く見事に理解されていた〕論理学はどうなるのか？　この場合，論理学の厳格さは崩壊するように思われる。——しかし，論理学の厳格さが崩壊すれば，それによって論理学が完全に消える事はないのか？——しからば一体，如何にして論理学はその厳格さを失うことが出来るのか？　勿論，論理学がその厳格さを失うことが出来るのは，人が論理学からその厳格さの幾ばくかを割り引く事によって，ではない。——〔論理学の厳格さを保証するところの，論理学は〕結晶のように純粋である，という予見は，我々が我々の全考察を〔180度〕回転する事によってのみ，清算され得るのである。（人は言うことが出来よう：考察は回転されねばならないが，しかしそれは，我々における本来の必要〔——言語を

そのありの儘に於いてよく見るという事――〕を旋回点として，なのである。）

論理学の哲学は，日常生活に於いて我々が――例えば「ここには中国語の命題が書き記されている。」とか「違う；それは漢字のようにしか見えないが，しかし，〔実は〕装飾である。」等々，と言うときに――語るのと同じ意味で，命題や語に就いて語るのである。

我々は，言語の時間-空間的現象に就いて，語るのであり；非時間的-非空間的な怪しげなものに就いて，語るのではない。［ウィトゲンシュタインによって，余白に書かれた注意書き：人は，一つの現象に就いて，種々な仕方で興味を持ち得るだけなのである。］しかし我々が，言語の物理的特性を記述するのではなく，言語〔ゲーム〕の規則を述べるときには，我々は，言語に就いて，チェスの駒に就いてのように，語るのである。

「本来，語とは何か？」という問いは，「〔本来，〕チェスの駒とは何か？」という問いと，類似しているのである。

〔ウィトゲンシュタインの脚注〕ファラデー『ろうそくの科学史』：水は，一つの個体である――それは，決して変化しない。〔ウィトゲンシュタインは第108節の冒頭で，言っている：我々が〔今〕認識しているところによれば，我々が「命題」とか「言語」とかと呼ぶものは，〔かつて〕私が〔『論考』で〕思い描いていた形式的な一単位ではなく，多かれ少なかれ相互に血縁関係がある〔諸〕構成物の家族なのである。ウィトゲンシュタインは，これに対する反例として，ファラデーの文章を引用したのであろう。〕

---

109. 我々の考察は科学的考察ではあり得ない，という事は，正しかった。「我々の予見に反し，〈あれ〉や〈これ〉やが考えられ得る，という事」――たとえ，この事が何を意味しようと――は，我々には興味がなかった。（思考〔というも〕の〔は〕心的〔な存在の働きである，という〕把握〔――これは，科学的考察に属する。〕）そして我々は，如何なる理論も提示してはならない。我々の考察には，如何なる仮説も存在してはならない。全ての説明が取り去られねばならず，そして，記述のみがその場所を埋めねばならない。そしてこの記述は，その輝きを，即ち，その目

的を，〔問題になっている〕哲学的問題から授かるのである。この哲学的問題は，勿論，経験的問題ではない；それは，我々の言語の働きに就いての洞察，しかも，我々の言語の働きが——それを誤解しようとする衝動に抗して——認識される様な洞察，を通して解かれる〔問題な〕のである。〔哲学的〕問題は，新しい経験を持ち出す事によって，ではなく，ずっと以前から知られていた事を，〔うまく〕組み合わせる事によって，解かれるのである。哲学とは，我々が所有する言語という手段〔(道具)〕によって，我々の知性が魔法にかけられている事に対する，戦いなのである。

110.「言語（或るいは，思考）は，或る比類の無いものである。」——これは，（誤りではなく！）それ自体，文法的諸錯覚によって招来された迷信である事が，明らかにされる。

そして今や〔そのために〕情熱が，この様な〔文法的〕諸錯覚——〔と，それらによって生じる哲学的〕諸問題——に，向かうのである。

111. 我々の言語形式に就いての誤解から生じる〔哲学的〕諸問題は，深淵という性格を持っている。それらは，〔心の〕動揺である；それらは，我々の言語形式がそうであるように，深く我々の中に根を下ろし，そして，それらの意義は，我々の言語の重要性がそうであるように，大きい。——自問せよ：なぜ我々は文法的な噴飯ものを深淵と感じるのか？（そして，これこそ当に哲学的深淵なのである。）

112. 我々の言語形式の中に受け入れられている比喩が，間違った外観を作り出し；〔そして〕その外観が，我々を不安にさせるのである：「それは，しかし，そうではない！」——と我々は言う。「しかし，それでもそれは，そうでなくてはならないものである！」〔——と我々は言わざるを得ないのである。〕〔この分かりにくい文章は，例えば，こういう事であろう：例えば我々は，「時が流れる。」と言う。これは，我々の言語形式の中に受け入れられている比喩である。そしてこの比喩が，〈時〉という〈もの〉が，川の流れの様に，流れるのだ，という間違った印象を作り出すのである。しかし我々は，考えてみれば，「それは，しかしそうではない！」という事に気づく。しかし他方では我々は，「しか

し，それでもそれは，そうでなくてはならないのである！」と言わざる得ないという誘惑を，感じるのである。かくして我々は，不安にさせられるのである。〕

113. 私は「それは，しかし，そうである。————」と，繰り返し繰り返し，自らに向かって呟く。それは丁度，もし私が，私の視線を完全にシャープにこの事実に合わせる事が出来さえすれば，即ち，この事実を〔私の視線の〕焦点に持ち込む事が出来さえすれば，私は事の本質を把握するに違いないかの如く，なのである。

114. 『論考』(4.5)：「命題の一般形式は，事態はシカジカである，である。」——これは，人が自らに数え切れないほど繰り返す種類の，命題である。人は，繰り返し繰り返し，事の本質を追い求めている，と信じている；しかし人は唯，それを通して我々が事の本質を考察する形式に沿ってのみ，進んでいるのである。

115. 像は，我々を摑んで放さなかった。そして我々は，それから脱却する事が出来なかった。何故なら，像は我々の言語の中にあり，そして我々の言語は，像を我々にただ容赦なく繰り返すのみのようだから。

116. 哲学者達が或る語——〔例えば〕「知識」「存在」「対象」「私」「命題」「名前」〔等々〕——を用い，そして事の本質を把握しようと試みるとき，人は常に自問しなくてはならない：それでは一体この語は，そこにその語の故郷があるところの言語〔ゲーム〕において，確かに事実その様に用いられているのか？——
我々はこれらの語を，それらの形而上学的使用から日常的使用へと，連れ戻す〔のでなくてはならない〕。

117. 人は私に言う：「しかし，君はこの表現を理解しているでしょう？　さて，そうであるとすれば——君が知っている意味で，私もまたその表現を使います。」——あたかも意味は，語が持っている雰囲気であり，そして如何なる使用に際しても，語はその雰囲気を持って来るが如く〔，ですね〕。

もし，例えば或る人が（彼の前に在る或るものを指して）「命題「これは此処にある。」は私にとって意味を持っている。」と言うならば，彼は，如何なる特定の状況に於いて，人はこの命題を実際に使うのか，と自問したらよい。その特定の状況において，その命題は初めて意味を持つのである〔から〕。

118. 我々の考察は，その重要性を〔一体〕何処から得ているのか？何故なら，我々の考察は，ただ興味ある全ての事を，即ち，偉大にして重要な事の全てを，破壊しているように見えるから。（言わば，あらゆる構造物を，ただ瓦礫と塵芥のみを残して〔，破壊しているように見えるから〕。）しかし，我々が破壊しているものは，単なる幻影なのである。我々は，〔幻影を破壊する事によって，〕幻影に占領されていた言語の地盤を，露にしているのである。

119. 哲学の成果は，何らかの単純な無意味の発見と，言語の限界に対する突進によって知性に出来た瘤，である。この瘤が，かの発見の価値を認識させるのである。

120. 私が言語（語，命題，等々）に就いて語るとき，私は日常言語で語らねばならない。では，日常言語は，我々が言いたい事に対して，きめが粗すぎ，形而下的にすぎるであろうか？〔そうではない。しかし，そうであるとすれば，〕それでは，一体，〔日常言語とは〕違う言語は如何に構成されるのか？〔その様なものは，構成されない。〕——そしてその場合，我々が，我々の日常言語でそもそも何かをする事が出来るという事は，何と不思議なことよ！

私が言語に関する私の説明に際し，（例えば，準備段階の，或るいは，暫定的な言語ではなく，）〔既に一人前になった〕完全な言語を使用しなくてはならない，という事は，私は言語に関する外的な事のみを述べる事が出来るのだ，という事を既に示している。〔しからば何故，「既に示している」のか？　この点に関しては，いろいろと議論があるが，さしあたり私はこう考えておく：もし私が，言語に関する外的な事以外をも述べる事が出来るとすれば，それは，言語の規則を述べる事が出来る，という事である。しかし規則は一般に，完全な言語によっても，述べる事が

出来ない。それ故，私は，完全な言語を使用しなくてはならないとしても，言語に関する外的な事のみを述べる事が出来るのである。〕

そうだ；しかし，そうだとすると，その様な説明は如何にして我々を満足させ得るのか？——さよう，君の問いは，もう既にその様な〔完全な〕言語によって，述べられていた；何かが問われねばならないならば，君の問いは，その様な〔完全な〕言語によって表現されねばならなかったのである！〔既に一人前になった完全な言語こそ，全ての土俵なのである。したがって我々は，言語に関する外的な事のみを述べる事で，満足すべきなのである。〕

そして，君のためらいは誤解〔の産物〕である。

君の問いは，語に関係がある；それ故，私は語について語らねばならない。

人は言う：問題は語ではなく，語の意味である；そして人はその際，意味を，たとえ語とは違っていても，語と同じ種類の事象を考えるように，考える。ここに語があり，あそこに意味がある〔という様に，である〕。お金と，それで買うことが出来る牛〔の様に，である〕。（しかし他方：お金と，それの使用〔，という対比も有り得る。そして，この対比が，語と，それの使用，という対比に当てはまるのである。なお，一部はアンスコムの英訳に従う。〕）

121. 人は，こう考えるかも知れない：もし哲学が「哲学」という語の使用に就いて〔も〕語るならば，二次的な哲学が存在しなくてはならない。しかし，全くそうではない；この場合は，正書法の教えの場合に，対応している。正書法の教えは，「正書法の教え」という語をも扱わねばならないのだが，しかし，だからといって，二次的な正書法の教えが存在するわけではない。〔同様に，哲学は「哲学」という語の使用に就いて〔も〕語るとはいえ，二次的な哲学が存在しなくてはならない，のではないのである。〕

122.〔言語に就いての〕我々の誤解の主な源泉は，我々は我々の語の使用を展望していない，という事にある。——我々の文法には，〔語の使用に就いての〕展望性が欠けているのである。——〔さて，語の使用に就いての〕展望を与える表現は〔その語に就いての〕理解を与えるが，

その理解とは，我々が〔その語の様々な使用の間の〕「諸関係を見る」という事に於いて当に成り立つものなのである。それ故，〔その語の様々な使用の間に〕中間の場合を発見したり発明したりする事が重要なのである。〔例えば，第23節を見よ。そこに於いては，「言語ゲーム」という語の使用に就いての展望が与えられている。〕

「展望を与える表現」という概念は，我々にとって，根本的な意味がある。それは，我々の表現形式——我々が物事を見る仕方——を表わしているのである。(それは「世界観」であろうか？〔そうである。〕)

123. 哲学の問題は「私は途方にくれる。」という形を持っている。

124. 哲学は言語の現実の使用を，如何なる仕方に於いても侵害してはならない。それ故，哲学は言語の現実の使用を，結局，ただ記述出来るだけなのである。

何故なら，哲学は言語の現実の使用を，基礎づける事も出来ないのであるから。

哲学は全てを，あるが儘にしておく。

哲学は数学をも，あるが儘にしておく。そして，如何なる数学的発見も，哲学を前進させることは出来ない。「数学的論理学の中心問題」〔(例えば「決定問題」)〕は，我々にとっては，他の全ての問題と同列の，数学の一問題なのである。〔(G. Hallett, *A Companion to Wittgenstein's "Philosophical Investigations"* p. 219参照。)〕

125. 〔数学に於ける〕矛盾を数学的——論理-数学的——発見によって解く，という事は，哲学の仕事ではない。我々を不安にさせる数学の状態——矛盾の解決以前の〔数学の〕状態——を展望可能にするという事，これが哲学の仕事なのである。(そして人は，この哲学の仕事によって，例えば，〔矛盾を解決する，という〕困難な仕事を回避するのではない。)

数学での矛盾発生に於ける基本的事実は，こうである：我々が諸規則と〔それに従う〕技術を或るゲームに対して立てる；〔ところが〕そのゲームは，我々がそれらの諸規則に従うとき，我々が思っていた様には行かない；そしてそれ故，我々は言わば我々自身が立てた規則に絡まってしま〔い，身動きがとれなくなってしま〕うのである。

我々の規則へのこの絡まりが，我々が〔哲学に於いて〕理解したい事，即ち，展望したい事，なのである。

この絡まりは，「思う」という我々の概念に光を投げかける。何故なら，つまり，この絡まりが発生する場合，そのゲームは，我々が思っていた——予想していた——様には行かないのであるから。例えば，〔この絡まり，即ち，〕矛盾が発生すると，我々は当にこう言うのである：「私はその様には思わなかった。」

矛盾のこの市民的身分，或るいは，市民世界に於ける矛盾のこの身分，これが哲学の問題なのである。

126. 哲学は，当に全てを唯その儘にしておくのであり，何も説明せず，何も推論しない。——全てはむき出しにそこに在るのであるから，説明されるべき何ものも無いのである。何故なら，例えば隠されているものは，我々には興味が無いのであるから。

全ての新発見と新発明に先だって可能であるものをも，人は「哲学」と呼ぶことが出来よう。

127. 哲学者の仕事は，或る特定の目的の為に，記憶を集め揃える事である。

128. 人が哲学に於いて〔，かつてヴァイスマンが試みたように（『ウィトゲンシュタインとウィーン学団』付録B），〕テーゼを立てようとするならば，そのテーゼに就いては，決して議論が起こってはならないであろう。何故なら，万人がそのテーゼに同意するであろうから。

129. 我々にとって最も重要な物事の諸相貌は，それらが単純であり且つ日常的である事によって，〔我々から〕隠されている。（人はそれらに気づくことが出来ない。——何故なら，人はそれらを常に眼の前にしているから。）哲学者の探究の本当の基礎は，——かつて気づかれた事がないならば——人には全く気づかれないのである。——そして，この事が意味することは，こうである：一度気づかれたならば，最も目立ち最も強力である物事が，〔実は〕我々に気づかれない〔でいる〕のである。

130. 我々の明快で単純な言語ゲームは，言語を将来規制するための予備的研究――言わば，摩擦と空気抵抗を無視した第一近似――ではない。そうではなく，その様な言語ゲームは，ここでは――類似性と非類似性を通して我々の言語の様子に光を投げかけるべき――比較の対象としてあるのである。

131. というのは，我々が我々の主張の不当さや空虚さから逃れ得るのは，ただ我々が範例を――それに現実が対応すべき予見としてではなく――比較の対象としてあるものとして――言わば，物差しとして――評価する事によってのみ，なのであるから。(〔範例を，それに現実が対応すべき予見として評価するという事は，〕我々が哲学するときにいとも易々と陥る独断〔なのである〕。)〔(第130節で言われた「明快で単純な言語ゲーム」は，此処で言われた範例の一つなのであろう)〕

132. 我々は，言語使用についての我々の知識を，整理をしようと思う。その整理は，或る一定の目的〔――言語使用に就いての展望を得るという目的――〕のための整理であり，多くの可能な整理の中の一つなのであるが，これこそが整理である，といった確定したものではない。我々は，その目的のために，我々の通常の言語形式を容易に展望させる区別を，常に強調するであろう。その様な区別を強調する事によって，言語使用についての我々の知識の整理は，あたかも我々は言語の再構成を我々の課題であると見なしているかの如き，観を呈するかもしれない。

特定の実際的目的のための言語の再構成や，実際的使用での誤解を避けるための我々の用語の改良，これらの事は，勿論可能である。しかしそれらは，我々が係わらねばならない事ではない。我々が関心を持つ困惑〔――哲学的困惑――〕は，言わば，言語が空回りしているときに生ずるのであり，言語が仕事をしているときに生ずるのではない。

133. 我々は，我々の語の使用規則の体系を，それまで聞いたこともないような仕方〔(例えば，ラッセルの「タイプの理論」を考えよ。)〕で，洗練しようとも完全なものにしようとも，思わない。

何故なら，我々が得ようと努めている〈明らかさ〉は，勿論，或る完全な〈明らかさ〉であるが；しかし，かく言う事で意味していることは，た

だ，哲学の問題は完全に消失しなくてはならない，という事なのである。

本来の発見とは，その気になれば，哲学する事をぱっと止める事を，私に可能にする発見なのである。——本来の発見は，哲学に平安をもたらし，その結果，哲学はもはや自分自身を問題にする〔哲学的〕問題によっては駆り立てられないのである。——〔本来の発見が行なわれれば，それによって，〕方法が諸事例によって示されるが，人はその諸事例の列を〔，その気になれば，〕ぱっと止める事が出来るのである。——〔本来の発見が行なわれれば，〕諸問題が解かれる（諸々の困難が除去される）のであり，一つの問題が解かれるのではない。

哲学には，諸方法が——言わば，種々の治療法が——あるのであり，一つの方法があるのではない。